

書 評

ロジェ・シャルティエ，グリエルモ・カヴァッロ編
『読むことの歴史——ヨーロッパ読書史』

Roger Chartier et Guglielmo Cavallo (éd)
*Histoire de la lecture dans le monde
occidental*, Paris, 1997

田村 毅，片山 英男，月村 辰雄，大野 英二郎，
浦 一章，平野 隆文，横山 安由美（共訳）
大修館書店 2000 年刊

北 村 直 昭

歴史学が扱う領域の中でも，比較的あたらしく生まれ，もっとも注目されている領域の一つが「読書の歴史」あるいは「読むことの歴史」である。本書は，この分野における現在までの研究成果を展望したものである。本書の優れた点は，第一に，いまなお急速に成長しつつある「読書の歴史」を古代から現代までの通史として，一冊の書物に収めた点である。本書によって壮大な読書の歴史を把握することができるようになったといえよう。第二の点は，概説的な通史にとどまらず，それぞれ時代ごとに最新の研究成果が具体的な事例を通じて論じられていることである。これは，本書が広大な時代を扱いながらも，それぞれの章を各時代の専門家が分担執筆していることによる。

本書の内容を全体的に見ると第6章を境に前半と後半に分けられる。時代の上で古代ギリシャから中世までを扱った前半部の中心テーマは，ある読書スタイルからもう一つの読書スタイルへの移行である。一般に

「音読」から「黙読」への移行として注目されているものだ。この移行は、それぞれの時代の歴史的な条件に規定されながら、少しずつ実現していった。古代ギリシャで黙読への移行の最初の一步が踏み出され、中世のスコラ学時代に完全な黙読が成立する。しかし、「読むことの歴史」はそこで終わるわけではない。この時点で読むことは、まだごく一部の人々に限られたものだった。そこで、本書の後半部ではさまざまな集団に属する人々へ「読むこと」が浸透していく様子、およびその背後に存在した統制や政治的な戦略が中心テーマとなる。全体の枠組みをこのように理解した上で、各章を簡単に見てみよう。

* * *

第1章「アルカイック期と古典期のギリシャ」では音読から黙読への移行の第一歩がどのように踏み出されたかが論じられる。ギリシャでは元来「声」が圧倒的に優位であり、文字は声を伴って読まれることではじめて意味をもった。書かれたものに読者が声を貸して読む行為は能動的である。そのため、黙読が可能となるには、読むことが能動的な行為から受動的な行為へ、本質的に変わらなければならない。この大きな転換をどこに求めることができるのか。著者が提案するのは「劇場というモデル」である。劇場では、舞台で行われる劇から観客は完全に切り離されており、たとえば主人公におこるであろう悲劇を、観客が俳優に先に知らせることはルール違反である。この「劇場というモデル」によって、文字に声を貸すことなく、テキストを受動的に聞くことを体験したことが、黙読への移行の契機と見なされる。

第2章「卷子本から冊子本へ」ではローマ世界の読書が論じられる。読者層については、すでに前一世紀には「読者のいくつかのタイプ」が存在した。すなわち、高度な教育を受け「教訓」を求めて読む読者と、あまり学はなく平易な文体の書物を「遊び」のために読む読者の二つのタイプである。それぞれの読者層が拡大するにつれて本づくりも発展する。前者のためにはそれに相応しく配慮された質の高い卷子本が作られるようになる。一方、後者の読者層は、もはや小さなサークルにとどまらず、女性読者を含むきわめて階層化された読者大衆を形成するまでにいたる。作家たちもこの読者層に向けた作品を書くようになり「消費のため」の文学、娯楽のための文学が成立する。読書の仕方については、

黙読も存在してはいたものの、音読の習慣の方が広く残っていた。そのため、文学作品から科学論文までの広範なテキストが修辞学に支配された。また、この習慣は読むことばかりでなく書き方をも規定し、文学作品には音読に相応しいスタイルと書き方の手続きが求められた。

しかし、この時代もっとも注目すべきは、書物の形態の変化、つまり卷子本から冊子本への移行である。冊子本の誕生により、文学作品のさらなる普及が可能となったばかりか、書物の形態の変化は著作作品の概念までをも変えた。この冊子本を積極的に採用したのは、ギリシャ・ラテン両文化圏でもキリスト教徒たちだった。キリスト教は、書物を通じて万人に向けられた宗教として、卷子本に慣れた既存の読者ばかりでなく、それ以下の教育水準の人々をも取り込むために、彼らが学習に用いて馴染んでいた冊子本を採用したのである。一方、識字率は冊子本が普及していく3世紀から5世紀にかけて読者数は低下し、読者数の減少はその後さらに拍車がかかる。

第3章「テキストの読解、筆写、解釈」では中世前期における修道院の習慣が論じられる。この時代は古代の伝統を継承するが、新しい点が二つあった。一つは、読まれるべきテキストが選択され、読書の目的が魂の救済となったことである。もう一つは読書をめぐる態度の変化で、より深くテキストを理解するのに適していると考えられた黙読に一層の注意が払われるようになった。それに伴って、イングランドで黙読しやすいようにテキストを提示する工夫が始まった。たとえば語順を理解するための注解や記号、旧来の「連続記法」に変わって単語の間に空白をおく分かち書き、引用文のための強調文字などである。これら視覚化の工夫は、やがて大陸にも導入されていく。

第4章「スコラ学時代の読書形式」では完全に視覚的な黙読の成立がさまざまな角度から論じられる。まず、読書の環境が変わり、中世初期には修道院であったのが、この時代は学校ついで大学が読書の場となる。つまり、修道院での霊的読書は大学での講読へと変貌した。それに伴い、読書のための利便性と効率といった概念が登場し、すぐにそれが最重要課題となる。参照箇所をすぐに見つけられるよう章や段落が区切られ、章には題がつけられ、用語索引、目次などが考案されたほか、引用文集も数多く作られた。こうして旧来の霊的読書に特有な読書スタイル、前

から順にゆっくりと読む読書スタイルに変わって、断片的に素速く読む視覚的な読書スタイルが実践されるようになった。この読書スタイルは、読書を取り巻いた環境と密接に結びついているだけでなく、「権威」への準拠を重んじる中世の心性と不可分に結びついている。また、この読書は直接テキストを読むのではなく、編纂者の仲介と選択をへたテキストを間接的に読むものである。編纂者によって選別されたテキストを利用することは、異端的な要素を避けるのに役立った反面、独創的な思想を生み出すことを難しくした。

第5章「中世後期の読書」では再び12世紀にさかのぼって、テキストの提示の仕方などから黙読の定着を検証する。大陸でも分かち書きが定着すると、ラテン語の語順の慣用が変化し、文法的につながる語がグループ化されるようになる。これにより、思想がより明確に表現できるようになり、句読法や速い黙読が発展する前提条件ともなった。写字生の筆写作业も聴覚的な方法から視覚的な方法へ移行していった。また、羊皮紙に適した書体と姿勢で書くことが考案されると、書くことと知的活動とが両立できるようになった。こうして作家は自らの筆で、内面的かつ個人的な感覚を表現できるようになった。同時に、口述著作の特徴である冗長性も排除され、書き手は自らの著作が黙読されることを想定して書いた。

黙読や自筆原稿への移行は新たな異端思想が育つ土壌となった。集団の中で声を出すことなく黙読することで、密かに異端思想を読むことも可能となり、秘書の介在なく書くことは集団的制裁を忘れさせたためである。ラテン語テキストの読者が実践するようになった黙読は、少し遅れて俗語テキストの読者にも浸透していく。俗語の読者も黙読によってプライバシーが保証されると、性的な空想に表現の自由がもたらされた一方で、聖職者以外の人たちも、神との個人的なつながりを追求できる手段をえた。信徒向けの時祷書の生産の増加からかれらの霊的な高まりが確認できる。他方、孤立した読書は信仰に対する疑念を抱かせることにもなり、宗教上の改革への気運が生じる契機ともなった。宗教改革の波及には印刷術との関係が知られているが、その地盤は10世紀末以来の長い発展で築かれていた。

第6章「ユダヤ人社会の読書」では西ヨーロッパ中世におけるマイノ

リティーであるユダヤ人社会の読書が論じられる。キリスト教化された西欧のユダヤ人の間では、かれらを取り巻いていたキリスト教世界との共通点も多く認められる。中世初期の書物の聖化現象や、ページ・レイアウトや書体の変遷などである。他方、中世ユダヤ人社会は、俗人への読書習慣の普及や、公共図書館という概念の発生など、キリスト教社会の近代的な要素を有していたのに対し、近現代まで読書を宗教的儀式として実践しようとするなど中世的な要素を残していたことは興味深い対照をなす。また、この章では読書をめぐる聖と俗、男女の性差、ヘブライ語と俗語の関係など幅広く論じられる。

第7章「人文主義者が読む」では、古典テキストの読みが論じられる。旧来の学説では、人文主義者はスコラ的な読書とは異なる読み方を導入し、古典に対して、中世人のように時間と歴史を超越した「権威」としてではなく、特定の時代と場所に生きていた現実の人物としての古代人に出会うように読んだとされる。この章では、この時代の読書の多様な実践に注目してそれを再検討する。実際の人文主義者の読みには「教え」を求めて読む読書や娯楽のための読書などがあつた。かれらの多様な読書を解明するために次の3つに焦点が当てられる。第一に、テキストを選び、本の形態を決めた「本の媒介者たち」の活動と嗜好。第二に、古典テキストに接するための技術。これは教育の方法から解明できる。最後に書齋で本がどのように扱われるかである。

需要をあらかじめ見込んで大量の本を制作した「本の媒介者たち」はテキストを選び、それに相応しい形態を定めた。そして、本づくりの上で挿絵を施すなどの工夫をして読者層を拡大した。教育者と読者について注目すべき変革は、読解の学習のある段階から、テキストを実用を使う時に起こった。古典テキストを要約し再活用のために加工することがこの時代の教育の核をなした。学者たちが生徒に与えるテキストは、様々な配慮によりわかりやすく加工されたものであつた。伝統的に考えられていたのとは違って、かれらが古代に直接触れていたわけではないことが分かる。書齋での読書を見ると、読むと同時に自分でも書き写し、欄外に書き込んだ。これはそのテキストについての著作を出版する準備のほか、本を仲間のサークルで共有して読むこの時代独特の読書スタイルから生まれた実践である。

第8章「宗教改革と読書」では印刷術が登場し、「読むこと」が爆発的に拡大する状況を宗教改革者たちがどう利用し、統制しようとしたかが論じられる。印刷術はすぐに歓迎され不可欠なものと考えられるようになったが、「読むこと」が野放しに民衆に浸透することへの警戒心もすぐに現れた。そのため、説教に参加させたり、教理問答などを積極的に利用するなどの方策を通じて、ほとんどの改革者が統制を敷いた。

第9章「読書と反宗教改革」では、カトリック側の態度が論じられる。トリエント公会議で強調されたのは、口頭による信仰の伝達様式、共同体における人間同士のつながり、聖職者と信徒の役割の区別である。それによると、信徒は聖典のテキストに直接当たる必要はなく、印刷本は名高い禁書目録などにより厳しく統制される。その一方で、教皇庁も慣習を統一したりプロテスタント系書籍商に対抗するため、必要なテキストの普及に印刷術を積極的に利用した。教会当局は聖書を民衆的なレベルにまで開かれたものとはしなかったが、聖書の翻訳は相次いで試みられ、状況は規制を敷く教会当局の思惑に反する方向へ進んだ。聖職者においても18世紀末に飛躍的に蔵書量が多くなり読むことが浸透していく。信徒においても16世紀から18世紀にかけて学校教育制度の進展とともに読者層が広がった。この時期の出版の圧倒的多数が宗教書で、そこに占める信徒用の書籍も増えていく。

第10章「読書と民衆的読者」では、書物の分布よりもその利用方法を、書物の所有よりもその読み方を考察すべきであると提唱される。つまり、書物の社会史に対して「読書の歴史」の必要性が論じられる。というのも、書物の社会史では、自分では所有していないテキストでも、借りたり聞いたりして、同一のテキストがすべての社会階層に流通していたにもかかわらず書物分布の差異だけで文化的な差異があったという結論に至る方法論的な限界があるからである。そこで、読書の歴史では境遇や教養の異なる読者たちが共有していたテキストの多様な使用形態に注意が向けられる。このアプローチは解釈学や受容の美学とも近いが、それらが読むことを普遍的なものであると見なしているのに対して、「読むことの歴史」は読む行為の具体的な様態を問題とし、書物の物質性のもつ機能や意味への注意を促している。

第11章「18世紀末に読書革命は起こったか」では、啓蒙の時代におけ

る読書の拡大が検討される。コミュニケーションによって成立した世論の出現によって、ドイツでは市民階級のアイデンティティーが形成され、書物が市民文化の原動力となった。識字率はまだ低かったが、読者たちの社会的な役割は大きく、フランス革命により新刊への関心も高まり、啓蒙のイデオロギーは有益な読書の実践を称揚した。推奨された読書は市民特有の「徳のメッセージ」、啓蒙の理想を伝播させた。この種の読書は独特な読書の様態、貸本屋と読書クラブのような集団的読書において顕著だった。他方、個人的な読書も存在し、小説に熱中する感傷的な読書が熱病のように広がった。出版の内訳を見るとラテン語と神学の優位が消滅し、世俗的で近代的な分野が増加するのがこの時代である。また、感傷的読書の流行により文芸書の割合が全分野で一位となり、拡散的な読書が支配的になった。

第12章「19世紀の新たな読者たち」では、読者層が女性、子供、労働者に広がった様子が論じられる。識字率は、1890年代には大都会に限らずほぼ一様に9割に達し、男女差も消え、西洋における書物の黄金時代を迎えた。じつに電子的メディアが登場する20世紀も目前である。19世紀になると小説も芸術様式としての地位が確保され、とくに女性たちに支持されたが、逆から見ると感傷的大衆小説を出版する際に第一の対象とされたのが女性だった。これは女性の役割と知性に対する偏見を裏付けるものでもある。一方、新聞など政治的なものは男性に向けられており、その背後には社会統制と政治戦略が見て取れる。子供や労働者など新しく登場した読者たちに対しても同じような社会統制が見えないところで働いている。

第13章「読書のための読書」では、これまでのヨーロッパ読書史をふまえて、世界全体に目を向けて「読むこと」の現在と未来が論じられる。そこで指摘されるのは識字率の上昇にもかかわらず、文盲の数が増えていることである。これは貧しい地域だけの問題でなく、先進国の大都市の中にも見られる。その理由が時に政治や宗教的であることが問題視される。また、今世紀の文字教育政策は、書くことよりも読むことに力点をおいているが、この選択にも価値やイデオロギーの規制・統制との関連が指摘される。このように権力から課せられる、読まれるべきものとしての「カノン」は伝統的読書と結びついて統制を行使してきた。しか

し、読書と出版の危機に直面しているいま、新しく力をもつようになった読書スタイルはもはや伝統的な諸権威に仕えるのではなく、無秩序に向かっている。世界の地域でそれぞれの特殊な事情はあるものの、現状の混沌とした状況を概観して本書が結ばれる。

* * *

以上、壮大な「読むことの歴史」の今日までの研究成果を見てきた。最後に評者の私見を述べてみたい。一つは、「読むことの歴史」とキリスト教文化研究の観点から、もう一つは、「読むことの歴史」のこれからについてである。

キリスト教文化研究の点では、たとえば読書史という観点から見ることで宗教改革や異端思想、個人的な信心などの現象の起源が10世紀末以来の読書スタイルや著述スタイルの変化にまでさかのぼるといふ指摘がある。これは、従来の歴史研究やキリスト教著作のテキスト研究だけからでは決して導き出されなかった指摘ではなかろうか。ここでは紹介できなかったが同じように興味深い指摘が、本書の中には他にも豊富にある。そのことはまた、読書史のこれからの研究成果が、いかに注目に値すべきものであるかを雄弁に語るものだといえよう。また、現代の私たちが馴染んでいる書物形態や、視覚的な黙読の読書スタイルは、キリスト教文化の中で1000年もの年月をかけて築き上げられてきたものであり、その間の政治・社会・文化・心性の中にその起源が求められる。このことは、日本においてもこれまで以上にキリスト教文化の研究が必要であることを物語っているのではなかろうか。

もう一つ、「読むことの歴史」のこれからについて考えてみたい。私見では「読むことの歴史」は異なる領域を結びつける可能性を秘めている。読むことで伝達される知識、信仰は、たとえば芸術や文学などさまざまな局面で表現されるし、書物の流布は常に政治、経済と結びついている。それゆえ、読むことの歴史はミクロな歴史研究と並行して、様々な分野との連携と対話を通じてマクロな視点を持ち続けることで、はるかに豊かなものになっていくだろう。さらに、読書史をもっとマクロな視点から見れば、本書で語られた「読むことの歴史」は西欧における文字文化の歴史でしかない。しかし、いま読書史が専門家のみならず、多くの人々の注目を集めている理由の一つは、私たちが電子の文化という新しい時

代を迎えているからに他ならない。そのことを考えると、文字文化そのものについても熟慮すべきである。それには、ヨーロッパの文字文化の歴史だけを見るのでは不十分であり、文字文化に先立つ声の文化と比較したり、ヨーロッパ以外の文字文化へ視野を広げたりしていかなければならないだろう。そのときはじめて、「読むことの歴史」が秘めている潜在的な可能性が十分に発揮されるのではないだろうか。いずれにせよ、本書の翻訳により、日本でも読書史の研究が盛んになっていくことを期待したい。